

アメリカの M.L.教材、韓国の M.L.教育とコンサート

マーク・マンノ（東海大学）、ハン・ヨンヒ（ソウル教育大学）

進行：脇山 純 書記：田中功一（文責）

アメリカの M.L.教材の活用

私が台湾の東海大学で授業テキストとして使用している「アーサー・フラッケンポール著 鍵盤ハーモニー（Arthur Frackenhohl Harmonization at the Piano）」の活用について報告する。このテキストは現在第6版(1991)であり、初版から多くの方々に使われてきた。特長はピアノ学習において和声が学べる点である。授業は中国語で進めているが、テキストは英語で記述されているため、卒業後に英語圏の大学へ進学する学生にとって有利になると考える。

テキストの目次全体を第1章から順に見ると、メロディーのパターンとそれに対する左手のハーモニーという形から始まり、はじめはI度・IV度・V度のハーモニーを学び、次にマイナーコードに進む。続いて、5度圏の7thコード課題へ進む。授業では1章から10章まではテキストに沿って行っているが、14章のスコア・リーディングは授業に取り入れるようにしている。最後の章はスケールとアルペジオ、そして音楽理論の章であり、移調奏も含んだ応用になっている。

次に各章の譜例の中から幾つか取り上げてみる。1章は1段目と2段目の譜例が同じコードで書かれているが、メロディーに応じてハーモニーが転回されている。課題の順序は、片手の課題、両手の課題、4声の課題となっている。2～3章はトニック、ドミナント、サブドミナント、そしてこれら主要三和音を短調で弾く課題となる。ここでは3和音の転回形の表記において、真ん中の音のみ指番号が記されている。真ん中の2番と3番が示されることにより転回形のパターンの把握が進めやすい。また、初心者が両手で困難な場合は片手でできる練習も可能である。最初から両手で弾くことが必要不可欠とは考えていない。一方で、弾き慣れた学生はシンコペーションの課題を順にキーを上げながら（実際にトニックとドミナントによる課題例を弾きながら）進めている。テキストでは最初の数小節のみが示されているが、その続きは自分が示して課題を進めている。

5～8章はVI度やIII度のコード、そしてこれら副三和音を短調で弾く課題となる。伴奏付けは、聴奏（聴いて弾く）で弾けると良いが、ここで扱っている課題の多くを学生が知らないため、実際には一つのメロディー課題に対して、伴奏のパターンを幾つか提示する課題を実施している。即興の課題では、逆な方法により、コードネームを提示してメロディーを示さない課題も行っている。また、移調の学習では、クラリネットやトランペット(B管)のようなハ長調以外の楽譜をピアノで弾くような課題へと発展していく。

(東海大学 マーク・マンノ)

韓国の M.L.教育と電子ピアノオーケストラ活動

ソウル国立教育大学で行っている電子ピアノオーケストラの研究の目的は、小学校において小グループで音楽を演奏する方法の研究である。初めはヘッドフォンを使っていた学生も、後には電子ピアノの表情豊かな多種の音によるアンサンブルに興味を持続できたようだ。このことから、電子ピアノアンサンブルは、大学の初心者と中級者および音楽大学のピアノ副科の学生の音楽性の育成に有意義であると考えられる。

音楽教育における電子ピアノアンサンブルの取り組みは、学習方法や音楽指導を理解する態度を通して学生を豊かにすると考える。今日、ピアノ愛好者が減りつつある中で、学生が共同活動をするにはピアノアンサンブルにとって必要であり、アンサンブルの経験は演奏者が社会活動する上で重要である。我々には小学校においてもこのような方向を目指す責任がある。

小学校には、ヴィオラ、オーボエ、チューバ、ティンパニー、コントラバスなどフルオーケストラの楽器が備えられている例は多くなく、それらの奏者も少ない。これらの楽器は扱うのに大き過ぎるため、電子ピアノがその代用として可能となる。電子楽器は正確なピッチで各楽器の音を出すことができる。

私が電子ピアノの可能性を示すために開催したあるコンサートでは、ステージに3～5台の電子ピアノ、シンセサイザー、パーカッションとピアノをセットして、四声の作品、ヴィヴァルディのヴァイオリン協奏曲、バッハの2～3台のハープシコード協奏曲、その他オーケストラ作品や協奏曲を演奏した。ここでは3～5名のピアノの専門家、打楽器奏者、さらに作曲家が一緒に参加し、コンサート準備を詳細に議論した。中でも、サウンドの決定は最も難しかった。

ある時、2台ピアノ8手のコンサートを開催した。この理由は電子ピアノのコンサートにおいてアコースティックなサウンドに満足していないためだった。それは演奏の構成や演奏内容が不満足な結果であったことではなく、そこに未解決で困難な問題の所在を認めただけである。それは、第1に、ヴァイオリンサウンドは未だパーフェクトでない点、第2に、クレッシェンドやディクレッシェンドの表現において、デリケートなキーボードタッチとペダルが共に満足できない点、第3に、アタックサウンドの改善の点である。したがって、より良い電子キーボードのサウンドを作り続ける仕事は重要と考える。よりよい電子ピアノ楽器であれば、多様な楽器をピアノで代行することが可能であるから、我々はさらに完全を目指したピアノアンサンブル活動の研究と実践を継続することが求められる。

(ソウル教育大学 ハン・ヨンヒ)